

6年間の青春をドラマに



書くことより取材自体が大
好きだという藤井誠二さん

れ、2万部を売り上げた。タイトルは『オイこら！学校』。「青臭い理論武装をしていました」と照れ臭そうに笑う。

取材して回った学校から、学校に苦情が寄せられたこともしばしば。だが、先生たちは「生徒が自分自身で考えて行動しているのだから」とうまく対処してくれた。友人との議論や勉強の場を提示してくれ、「ほどほどにやれよ」と声をかけてくれた。「自主性を重んじる校風だった」

進学した大学は3日でやめ、以降、フリーで書き続けている。でも、「書きたいことがあってこそこの仕事。なくなればメディアにいる必要はない」と潔く。

テレビドラマ・プロデューサーの関谷正征さん(49、86年卒)は中高時代、全く勉強をしなかったという。大学受験前の3年生の成績は「忘れも

しない511人中507番」と笑う。

試験に出ないことは本当によく頭に入った。友だちのしぐさや友だちと交わした会話、先生のくせ。答案に正しい答えを書くのではなく、いかに面白くするかに頭をひねる生徒だった。

そんな記憶が今の仕事にとても役立っている。「自分が手がけたドラマは、中高6年間の青春の焼き直しと言っても過言ではない」と言う。

大学生のころ、就職活動に先駆け、知っているようで知らない自分を本気で知ろうと、「好きノート」を作った。「好きだな」と感じたことを片っ端からひたすら書いていく。「こいあんよりつぶあんが好き」と書くだけでも自分のことがわかってきた。

読んだ本や見た映画の好きな理由もたくさん書いた。自分の良さを伸ばすのにとても役立ったと話す。

「肩書や資格? そんなものでは社会で勝負できません。自分という人間を売りたいにはどうすればいいか、いつも考えてはこころ」

(浴野朝香)

「俳優を口説いて自分のドラマに出てもらうのもドラマプロデューサーの仕事です」と話す関谷正征さん



取材したことをまとめたものを岩波書店の雑誌「世界」に投稿したところ、東京の出版社が注目。本になって出版さ

次回(6月18日号)からは、東京都世田谷区の田園調布学園中等部・高等部です。